

第3種郵便物認可

京都市の無形民俗文化財

江戸後期の松ヶ崎題目踊

京都市の無形民俗文化財に登録されている「松ヶ崎題目踊」

(左京区)の江戸時代後期の様子を描いたとみられる掛け軸がこのほど入手した。現代に受け継がれてきた踊りの変遷を知る貴重な史料として地元の保存会も注目している。

京の会社、掛け軸入手

掛け軸は縦約2尺、横約0・4尺。「松ヶ崎」の文字が入った提灯の下、太鼓を囲んで男性が踊り、その周囲に女性がかがむ様子が描かれている。掛け軸は双幅で、一乗寺の念仏踊を描いたとみられる絵とセツトになって

いた。

現在との違いについて、地元で踊りを継承してきた松ヶ崎立正会

の北野正彦理事長(70)

は「雰囲気は同じだが、男と女で動きが違い、

扇子や上げるなど、今の踊りにはない動作が

あって興味深い。踊り



変遷解明へ注目 今はない動作も

もいろいろ変わってきたのかもしれない」と分析する。

福岡県立美術館(福岡市)によると絵の作者は、落款と署名から絵師斎藤秋圃(1769~1861年)という。京都出身とされる秋圃は、円山応挙の弟子で、後に九州の秋月藩(福岡県)のお抱え絵師となった。掛け軸は、オークション会社の古裂會(中京区)が福岡の古美術商から入手した。

市文化財保護課によると、江戸時代の案内書「京雀跡追」などに17世紀後半の松ヶ崎題目踊の様子が描かれた掛け軸、扇を上げるなど、現在ない動作も含まれているという(京都市中京区・古裂會)――撮影・船越正宏

目踊の様子が描かれているが、江戸後期の絵はなかったという。民俗芸能に詳しい藝術史研究会(上京区)の山路興造代表は「服装や動作が分かる。江戸時代後期にかけての題目踊の形態の変遷を考える上で貴重な史料。秋圃は晩年に京都を旅したが、修業していた若い頃に京都で踊りを見て描いたことも考えられる」とする。

松ヶ崎題目踊 京都市左京区の涌泉寺で8月15、16日に行われる盆踊り。1306年に住職が、松ヶ崎の住民が法華信者となったことを喜んで踊ったのが始まりという。「南無妙法蓮華経」のお題目を唱え輪になって踊る。1983年に「さし踊」とともに市無形民俗文化財に登録された。